

在日二世、三世華僑華人の中華文化志向研究

——神戸華僑華人と在日福清華僑華人の比較——

郭 玉 聡 ・ 朱 新 建

0. はじめに

神戸華僑（外国に居住する中国人）華人（外国籍の中国人）社会は日本華僑社会において特色をもっている。一世華僑華人の場合、1920年代以来、日本各地を見ても、神戸（神戸市周辺、兵庫県内を含む）のほうが他より人数が多かったが、二世三世の場合でも、1984年と1992年に調査した結果を見ると、日本華僑の総数はそれぞれ22,318人と26,388人のうち、神戸にはそれぞれ6,504人と6,780人おり¹⁾、各地域ではもっとも多かったことがわかる。従って、日本華僑華人社会においては、神戸華僑華人はその代表だと言える。また、1990年代には、二世三世華僑華人の数は一世をはるかに超え、今や神戸華僑華人社会の中核をなしている。

一方、現在日本在住の中国福建省福清県出身の華僑華人は在日福建籍華僑華人の大多数を占めているが、その社団のいずれも「福建同郷会」と名づけられ、観光や集会活動も「旅日福建同郷懇親会」と命名されている。1950年まで、福清県の高山、東瀚の2つの村だけでも日本への移住人数は1,500人であった。現在、在日福清県出身者（以下、福清人と称す）は8,000人前後まで増えていた。日本では、福清人のいる県にはいずれも「福建同郷会」があり、在日「福建同郷会」が2年おきに1回は、日本やその他の国で会合を行なう。人数的に見ても、在日福清県出身の華僑華人は、神戸の華僑華人に匹敵するほどである。福清人は日本各地に散在し、地域的にも広範囲であるが、世代も二世三世以上になった。アンケートの結果を見ても、60歳以上の者の39%が日本生まれであることを示している。本稿は、神戸華僑華人と福清人華僑華人を比較し、在日華僑華人の中華文化志向を明らかにしたい。

「エスニック・アイデンティティ」(<ethnic> identity) は英語ではロジック術語の「同一性」

または「一緻性」にあたり、1950年代末期には新フロイト学派のエリクソン (E. Erikson) 氏はそれを心理学的な概念としていた。心理学から言えば、人間の人格の発展には、私は誰？ 私は何？ 私はいったい何をしたか？ 私は何をすべきか？ など、人間の自己定義問題が生じ、それから個人以外の対象（団体、観念、理想などを含む）に対して帰属意識が生ずる。1960年代以来、「アイデンティティ」という概念は広く人文社会科学の各分野に応用されている。心理学、民族学、社会学、文化学における「文化志向」(cultural identity) も互いに重なり合い、主として個人が民族伝統または民族特徴を反映するある文化に感情的な結合が生じ、心理的に自分がある文化に属し、ある文化集団または文化共同体の中の一員であると思うようになっていく。

二世三世華僑華人を研究するにあたって、その居住国における調査が必要である。1992～1993年、日本文部省が「関西とアジア」特定研究プロジェクトを実施したが、そのうちの、「国際化時代と神戸の華僑華人」という課題及びそのアンケートは「神戸華僑華人研究会」会長で、神戸大学教授の安井三吉教授が主宰し、当時、日本研究留学中の筆者の一人、郭玉聡もこの研究グループに参加することができた。アンケート用紙は985部を配布し、有効回答が257部あった。主な調査対象は神戸の18歳以上の二世三世華僑華人であった。調査内容は一般状況から帰属意識、婚姻状況などにわたり、主として文化志向の問題に力を入れた。2002年10月、在日「福建同郷会」は中国廈門市で会合が行なわれ、郭玉聡は同大会組織委員会の了解を得て、「神戸福建同郷会」、「東京福建同郷会」及び林同春氏、林聖福氏などの協力のもとに、上述のアンケート用紙を用いて出席者に対して調査を行なった。アンケート用紙を125部配布して、112部回収し、そのうち有効回答が102部あった。この二つのアンケートを分析し、以下のようにまとめることができる。出所を明記していない調査結果はすべてこの二つのアンケート調査によるものであった。

1. 中国人としてのアイデンティティ

神戸華僑華人二世三世はすでに日本で安定して暮らすようになり、日本に帰化する傾向はあるが、そのほとんどは自分が中国人または華僑としてのアイデンティティを有し、中国人としての自覚をもっている。

1.1. 帰化の傾向はあるが、同化されることを意味しない

1980年代、日本はすでに世界第二の経済大国になっていた。政治大国、文化大国の地位を求めするために、日本朝野は日本社会の「閉鎖」という欠点を克服し、「国際化」潮流について

いく意があった。華僑華人に対しては、差別政策がしだいに放棄され、帰化に関する制限が緩められた。

過去においては、日本の国籍法では父系血統主義原則が採られ、父親が日本人であって初めて子供が日本国籍を取得できることになっていた。1985年には「改正国籍法」が実施され、父母系血統主義原則が採られ、母親だけが日本人であっても、その子供も自動的に日本国籍を取得できるようになった。その他の帰化条件と実際の手続きも緩められていた。このような状況のもとで、華僑の帰化はかなり目立つようになった。

257名の神戸の回答者のうち、本人が日本国籍を有する者は1975年には総数の6.82%を占めたにもかかわらず、1985年には13.39%に増え、1993年には22.22%に達した。帰化の人数はほぼ10年ごとに倍増していた。また、19.8%は帰化を希望し、17.74%は子供の帰化を希望している。ここ数年来、帰化の増加率がもっと高くなっている²⁾。102名の福清人回答者のうち、23名がすでに帰化し、22.5%を占め、帰化の比率が前者と同じぐらいである。

神戸の二世華僑領袖である陳徳仁氏、黄躍庭氏、福清人華僑領袖の林同春氏らは日本華僑の傑出した代表であるが、彼らも華僑の帰化を唱え、その子供の一部もすでに帰化している。

華僑二世三世の帰化傾向は目立っているにもかかわらず、大多数の華僑の帰化は生存の必要によるものであり、彼らがすでに日本社会に融合したまたは日本社会に融合しやすくなったことを意味しない。アンケートの結果を見ても、彼らのほとんどは相変わらず華僑としての特徴を保っていることがわかる。

1.2. 彼らのほとんどは中国人としてのアイデンティティを有し、中国人としての自覚をもっている

「自分は誰？」という問題に対して、二つのアンケートの回答は次のような結果を示している。

華僑の定義は明白であり、表1のように、彼らが「華僑」を選んだのはちょうど適切なものであった。華僑の実質は中国人で、日本政府もそれを在日中国人と定義しているから、「華僑」を選んだ者は中国人と認められるべきである。表2では神戸の回答者のうち、「華僑」と「中国人」を選んだ者は合計58.4%であった。回答者のうち、88.3%が日本生まれで、その後も日本に何十年も暮らしていたものの、半数以上は中国人としてのアイデンティティをもっている。これは神戸の二世三世華僑華人の重要な特徴の一つである。顕著な対照をなしたのは、回答者のうち22.22%が日本に帰化した華人で、華人は日本政府によって日本人と認められているものの、日本人だと回答した者は1.2%しかいなかった。華人だと回答した者は、中国人でもあり日本人でもあると回答した者と同様、中国人としての自覚はまだもっていることがわ

表1 神戸華僑華人の「自身は何人か」に関する回答 (単位:人)

回 答	年 齢											合計
	18-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60～	不明	
中国人	6	4	7	8	9	11	9	10	9	11		84
華 僑	7	7	6	10	5	6	6	10	3	5	1	66
華 人	1	1	1	1	2	1		2	2			11
日本人			1					2				3
中国人でもあり、日本人でもある	9	5	7	8	16	10	8	8	4	5		80
何人か時々わからなくなることがある	4		2	2		1	1	1	2			13
合 計	27	17	24	29	32	29	24	33	20	21	1	257

表2 神戸華僑華人と福清人華僑華人の「自身は何人か」に関する回答の比較

回 答	神戸華僑華人		福清人華僑華人	
	人 数	%	人 数	%
中国人	84	32.7	34	33.3
華 僑	66	25.7	56	54.9
華 人	11	4.3		
日本人	3	1.2	4	4
中国人でもあり、日本人でもある	80	31.1	22	21.6
何人か時々わからなくなることがある	3	5.1		
合 計	257	100	102	100

かる。この部分の回答者は35.4%を占めていた。

福清人回答者のうち、中国人だと回答した者は34人で、華僑だと回答した者は56人で、合計90人にも達し、88%を占めた。回答者のうち、95人(93%)は日本生まれで、23人(22.5%)は華人であるが、日本人だと回答した者は4人(4%)だけであった。この二つの比率はいずれも神戸華僑華人よりも高かった。これは福清人華僑華人のアイデンティティがもっと明確であることを反映しているが、中国人としてのアイデンティティの比率が88%にも達したというのははるかに神戸華僑華人より多いだけでなく、世界の華僑華人の中でもめったにない高い数値である。

中国人はもちろん「中国」と密接な関係にある。言語や語義の象徴、派生、比喩からは人々の文化心理の傾向を反映している。次の文化心理分析法から回答者がどのように「中国」を見ているか見てみよう。

中国との親近感から中国を祖国だと思い、中国に対する程度の違う熱愛心理から、黄帝子

表3 神戸華僑華人の「中国を象徴する言葉は何か」に関する回答（単位：人）

回答	年齢										合計	
	18-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60～		
祖 国	18	8	16	12	19	16	11	21	9	11		141
中華人民 共和国	6	4	9	13	5	8	4	6	3	4		62
台 湾	1	1	2	1	1	2		1	1	1		11
中華民族	2	3	3	4	5	8	4	9	4	3		45
黄帝子孫					3				1	2		6
地大物博	3	4	2	2	2		1	2				6
悠久の歴史	9	8	9	12	9	1	3	12	7	8		98
輝かしい 文明	2		2	3	4	3	6	4	3	4	1	32
その他	2	1	3	3	4	2		3	1	1		20

注：表3及び次の文はいずれも複数選択問題で、各年齢層の人数は表1と同じ。

表4 神戸華僑華人と福清人華僑華人の
「中国を象徴する言葉は何か」に関する回答の比較

回 答	神戸華僑華人		福清人華僑華人	
	人 数	%	人 数	%
祖 国	141	54.9	83	81.4
中華人民共和国	62	24.1	29	28.4
台 湾	11	4.3	2	2
中華民族	45	17.5	13	12.7
黄帝子孫	6	2.3		
地大物博	6	6.2		
悠久の歴史	98	38.1	26	25.5
輝かしい文明	32	12.5	14	13.7
その他	20	7.8	1	1

孫、輝かしい文明、悠久の歴史、地大物博、中華民族などを引き出す。

「中華人民共和国」は中性語であるが、表1では自分が中国人だと思ふ華僑華人は表2で「中華人民共和国」を選んだ者がかなりおり、彼らの目では「中華人民共和国」は「祖国」と同じく親近感を感じるだけでなく、中国人としての正統感ももっている。例えば、福清人華僑華人のうち、11人は自分が中国人だと思ひ、中国を象徴する言葉として「中華人民共和国」を選んでいる。

ここで指摘したいのは、回答者のうち、台湾同胞が21.5%を占め、そのうち台湾出身者は16

人で、総人数の6.2%を占めたが、中国のシンボルは台湾で中華人民共和国ではないと思う者は4.3%しか占めていない。

次に指摘したいのは、中国人、華僑だと回答し、中国を祖国だと思っている、35歳以下の若者の比率は中高年者のそれよりも高い点である。

福清人華僑華人のうち、「祖国」と回答した者は83人で、その比率は81.4%にのぼった。彼らの年齢は比較的高い（60歳以上の者は43.1%を占めた）が、中国志向の比率は同じ年齢層の神戸華僑華人をはるかに超えている。

文化心理は個人または民族のもっとも内在的な特徴を具現するものである。表3、4からもわかるように、ほとんどの回答者は自分が中国人である心理で中国を見ている。一部の人は中国人の特徴をもつ心理で中国を見ている。これに反し、外部の雰囲気は彼らに影響を及ぼす場合と、外部の判断ないし外部の目で彼らに対処する場合、彼らに心理的な暗示作用を生じさせ、彼らを心理的に中国人と密接な関連付けにさせる。アンケートのように、95%の人は中国人としての自覚をもっていることがわかる。

二世三世華僑華人の中国人としての自覚は当然ながら彼らの中国への国家志向と同一視できず³⁾、生物的な中国人としてのアイデンティティではなく、文化的な中国人としてのアイデン

表5 神戸華僑華人と福清人華僑華人の「自分が中国人を意識した時」に関する回答の比較

回 答	神戸華僑華人		福清人華僑華人	
	人 数	%	人 数	%
いつも	61	23.7	27	26.5
家にいる時	10	3.9		
華僑学校に行った時	38	14.8	3	3
中国からの親戚や知人が来た時	33	12.8	16	15.7
テレビで中国チームの試合を見た時	73	28.6	34	33.3
中国に戻った時	24	9.3	26	25.5
日本人学校に入った時	67	26.1	6	5.9
就職した時	40	15.6	5	4.9
結婚した時	38	14.8	10	9.8
中国、華僑関係の行事に参加した時	68	26.5	66	64.7
家族、知人の冠婚葬祭に列席した時	78	30.4	19	18.6
外国人登録証明書の切替をする時	159	61.9	52	51
民族的な差別を受けた時	22	8.6	8	7.8
その他	12	4.7	4	3.9
不 明	2	0.8		

ティティである。ドイツの有名な思想家であるカシール氏は次のように言っている。「人間は文化を創造する活動において本当の意義をもつ人間となり、文化活動においてこそ人間は真の『自由』が獲得できる」⁴⁾。言い換えれば、人間は文化の動物で、中国人としてのアイデンティティが主として中華文化への志向である。

福清人華僑華人の各回答項目の比率は神戸華僑華人と大体同じであるが、しかし、「中国、華僑関係の行事に参加した時」という回答の比率は特に高い。これは彼らが中国に帰国し、「在日福建同郷懇親会」に参加していることと関係がある。これに対し、「華僑学校に行った時」という回答の比率が低いという原因は主として、彼らが日本各地に分散しているのに、日本の多くの地域には華僑学校がなく、42人(41%)しか華僑学校に入っていなかったことにある。ここで注意されたいのは安井三吉教授のアンケートの対象はいずれも神戸同文学校の卒業生であったが、福清人華僑華人の華僑学校の入学率は低いけれど、その中国人としての意識は同文学校の卒業生より弱いとは言えない。

3. 中華文化志向

二世三世華僑華人は中華文化の伝承と宣伝に力を入れていることは、中華文化への志向を反映している。

3.1. 中国の言語文字などの文化知識の習得を重んずる

アメリカの著名な人類学者であるホワイト氏は、「すべての文化(文明)が符号(言語と文字)に頼る。符号の使用を通してはじめて、文化の永久的な存続が可能となる」と言っている⁵⁾。神戸華僑華人二世三世の卒業生及びその親は神戸中華同文学校に深い感情を持っている。中華同文学校には小学部と中学部があり、中国語で授業している。同校の宗旨は、「民族教育を通して華僑子弟に祖国に関するあらゆる知識を正確に理解してもらい、徳育、知育、体育の各方面の健全な発展をさせ、三好五愛や自覚性を持つ中国人になってもらい、中日友好のために積極的な貢献をしてもらう」ということである⁶⁾。

中華同文学校については、神戸華僑華人に対するアンケートを見たいと思う。

表6と表7から見れば、絶対多数の親が子供を中華同文学校へ送る目的は同校の宗旨に賛同しており、絶対多数の卒業生もその目的を実現した。卒業生のうち、「中国人としてのアイデンティティが確立できた」と回答した者と「華僑社会のネットワークに参加できるようになった」と回答した者は合計65.4%に達し、「中国人としての自覚を確立してほしいと思ったから」と回答した親の比率よりも高い。また、親と卒業生のうち、中国人(華僑を含む)としての自

表6 神戸華僑華人の「両親が子供を中華同文学校に入学させる目的」に関する回答

回答	年 齢										合計	
	18-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60～		不明
中国人としての自覚を確立してほしいと思ったから	16	12	18	13	19	20	11	19	9	12		149
中国の伝統と文化を学ばせるために	13	7	10	10	14	14	13	20	11	6	1	119
中国語をマスターさせるために	21	9	16	23	16	17	15	20	11	10		158
家から近かったので	2	3	1	3	2	1				1		13
その他	2		2	4	3	1	2		3			17
不 明					2		1			3		6

表7 神戸華僑華人の「中華同文学校に入ってよかったことは何か」に関する回答

回答	年 齢										合計	
	18-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60～		不明
中国人としてのアイデンティティが確立できた	12	9	14	10	16	15	8	15	11	8		118
中国語が習得できた	24	13	20	28	24	27	20					217
民族文化が勉強できた	13	8	9	17	11	16	11	15	9	9		118
国際的感覚が養えた	6	6	6	5	3	4	1	5	7	1		4
日本人学校と同等の学力が得られた	4	4	5	6	8	6	5	6	4	4	1	53
華僑社会のネットワークに参加できるようになった	1	2	3	6	4	8	5	9	3	9		50
先生方が親身になって指導してくださった	7	6	1	4	1	5	4	7	2	7		4
校風が自由であった	1		4		3	1	2	2	4	2		19
その他	3		3	2	3		2	1				44
不 明					1		1			1		3

覚の確立、中華文化の学習、中国語の習得を選ぶ若者の比率は年長者の比率より高い。

ここで福清人華僑華人と神戸華僑華人とを比較する可能性があるのは華僑学校に入学した42名の回答者であった。次の表のように比較して見たいと思う。

福清人華僑華人の「中国語をマスターさせるため」と本人の「中国語が習得できた」、「民族文化が勉強できた」の比率は神戸華僑華人より低い。これは華僑華人の集住地以外の中国語教育条件の悪い状況を反映している。しかし、福清人華僑華人の親が子供を華僑学校に送り込むのは「中国人としての自覚性を確立してほしいため」で、本人が華僑学校に入学してから「中

表8 神戸華僑華人と福清人華僑華人の「両親が子供を中華同文学校に入学させる目的」に関する回答の比較

回 答	神戸華僑華人		福清人華僑華人	
	人 数	%	人 数	%
中国人としての自覚を確立してほしいと思ったから	149	58	33	78.6
中国の伝統と文化を学ばせるために	119	46.3	12	28.6
中国語をマスターさせるために	158	61.5	10	23.8
家から近かったので	13	5.1	1	2.4
その他	17	6.6	15	35.7
不 明	6	2.3		

表9 神戸華僑華人と福清人華僑華人の「中華同文学校に入ってよかったことは何か」に関する回答の比較

回 答	神戸華僑華人		福清人華僑華人	
	人 数	%	人 数	%
中国人としてのアイデンティティが確立できた	118	45.9	32	76.2
中国語が習得できた	217	84.4	31	73.8
民族文化が勉強できた	118	45.9	14	33.3
国際的感覚が養えた	44	17.1	7	16.7
日本人学校と同等の学力が得られた	53	20.6	4	9.5
華僑社会のネットワークに参加できるようになった	50	19.5	12	28.6
先生方が親身になって指導して下さった	54	21	4	9.5
校風が自由であった	19	7.4	4	9.5
その他	14	5.4	10	23.8
不 明	3	1.2		

国人としてのアイデンティティが確立できた」「華僑社会のネットワークに参加できるようになった」という回答の比率は神戸華僑華人よりも高い。これは中国人としてのアイデンティティがもっと強いことを物語っている。

3.2. 中華文化を広く宣伝する

神戸中華同文学校は日本屈指の華僑学校だけでなく、世界各国の華僑学校に匹敵するだけのものがある。華僑華人子弟のほとんどはここを第一に選ぶ学校としている。第二次世界大戦において、同校は砲火で平地にされ、多くの華僑が同校の復興への支援に余力を残さなかった。延べ1,200人余りが献金し、これは1家族1人の計算になる。学校が復興してから今まで、神

戸華僑と福清人華僑の代表として陳徳仁氏、林康秀氏、黄耀庭氏及び林同春氏らはとりわけ大きな貢献をした。また、他国の華僑社会にめったに見られない文化教育施設もあり、中でも陳徳仁氏らが創設した中国以外の最初の華僑博物館である神戸華僑歴史博物館、海外で規模のもっとも大きい孫中山記念館、また、会員の多くが華僑華人であり、よく活躍している神戸華僑華人歴史研究会もそのひとつであり、華僑華人二世三世の文化活動に大きな活力と創意をもたらした。その他、度々戦火と天災によって壊され、建て直されるたびに規模が大きくなった関帝廟や南京町（中華街）もそのひとつである。関帝廟や南京町などは華僑華人の祭祀、集会の場だけでなく、彼らが演劇や竹馬踊りの行進などの活動をし、中華文化を伝播する場でもある。

中華文化の雰囲気濃厚であってはいじめて、6千名余りの華僑しかいない神戸には、華僑華人の文化名人が輩出し、すばらしい業績がたくさん残っている。二世三世華僑華人の多くの作品は中国の歴史文化に関連している。例えば、著名作家の陳舜臣氏の中国歴史小説や陳徳仁氏、陳來幸氏の華僑華人、孫中山に関する論著、福清人華人の林愛蘭氏編著の『一衣帯水』、福清人華人の林愛艶氏編の『沁園春』などがそれである。

3.3. 中華文化を伝承し、広める過程において中華文化志向を強める

中華文化の保持体または感性代表への親近感とは心理的に二世三世華僑華人の中華文化志向を反映している。上述の神戸華僑歴史博物館や孫中山記念館および関帝廟や南京町以外に、中華義荘や華僑幼稚園、華僑総会、同郷会館などにも深い中華文化の蘊蓄のある場所である。アンケートによれば、これらの場所への親近感に関して聞かれると、神戸華僑華人の95.3%がその中のいずれかの場所を選び、しかも、72.3%の人は上述の場所で行なった行事に参加した。

二世三世華僑華人は日常生活や行動においても基本的に明確な中華文化志向を示している。例えば、既婚または婚約の132人（66人。括弧内は福清人華僑華人の人数または比率である。以下同）のうち、68.2%（77.3%）が中国語を使用し、8.3%（6.1%）が中国語と日本語を使い、22%（16.7%）が日本語を使っていることがわかる。華僑華人の日本における配偶者の選択は、中国人を重視する向きがあるが、人口が少ないため結婚できなかった華僑女子が多かった⁷⁾。それで、華僑華人が次第に日本人と結婚するようになった。同じ理由から、彼らは日本で日本語を話さないわけにはいかないから、日本語は彼らの第一言語になっている。しかし、彼らは誰と結婚しても、一生の大事に関係する婚約書には、ほとんどの人が中国語を使用する。イギリス言語学者のパモール氏は、漢語は「中国文化の脊梁である」と指摘している⁸⁾。大事な書類において漢語を選択するのは、二世三世華僑華人が相変わらず中国文化の伝統を守っていることを物語っている。

4. 中華文化志向の理由

要するに、日本の二世三世華僑華人は一貫して中華文化を志向しているが、これはもちろん彼らの日本文化への志向を排斥しない。彼らが異なる文化環境に生まれ育ち、文化の受容性も多面的であるため、言い換えれば、彼らは二重文化志向をしている。また、アンケートの結果のように、中華文化志向に関して、若者は年長者のそれよりも強く、少なくとも若者の中華文化への志向が著しく弱まっていないことは明らかである。

華僑の帰化傾向が日増しに顕著になってきた1990年代においても、なぜ二世三世華僑華人は全体として相変わらず中華文化を志向しているのか？

その原因は多方面にわたっている。中華文化は以前から「伝統不断」の特徴をもっており、かなりの安定性と強い生命力をもっている。在日華僑が中国と故郷を熱愛するのは先賢達の影響によるところが大きい。在日華僑華人社会は中華文化の雰囲気濃厚である特色をもっている。これらはその内因で、外因は主として日本社会によるものである。戦前のように日本政府の民族差別と華僑華人に対する不平等な待遇はいうまでもなくそれに拍車をかけ、華僑華人が中華文化を志向する重要な要素となっている。

百年近く以来、当時の日本政府は中国侵略戦争を起こすたびに在日華僑を「敵国人」として迫害を加えたものである。とくに第二次世界大戦中、当時の日本政府の華僑に対する迫害がひどいものであった。1934年には、在日華僑は僅か23,001人しか残っていないにもかかわらず、1935～42年には日本内務省警保局の記録だけで検挙・放逐された華僑が5,271人にも達した。彼らは無残な迫害を受けた。1987年日本学者の小川幸代氏は「神戸の南京町と華僑インタビュー」⁹⁾という文章を書き、文中の華僑家庭にはいずれも当時迫害を受けて死亡した者がいた。筆者の郭玉聡が日本留学中に訪問した華僑の中でも、何十人もの華僑が自ら進んで当時我が家の悲惨な遭遇を訴え、各家庭とも血と涙の過去をもっていることがわかった。最近になっても、林同春氏と神戸華僑の曾国忠氏は文章を發表し、演説を行い、特高課の暴行を訴えていた。林同春氏は、少年の時何回も監禁され、厳刑で拷問され、同じく華僑仲間の一人が拷問されてその場で死んだが、死んでも死に切れない目をしていたのを今も忘れない。彼がもっとも心の痛みに耐えかねるのは中学校時代に、担任の日本人先生に生きた的として捕られて、クラスメートの日本人生徒の突撃練習にされたことであつたそうである。台湾籍の曾国忠氏は次のように語った。在日台湾人は全部帰化を強いられ日本人になったが、彼の家もそうで、父は日本名に直したくなかったため、特高課に捕まえられて苛まれ、39歳で死んだそうである¹⁰⁾。当時のような野蛮な支配と同化への強迫は彼らに深い傷口を残した。華僑でも華人でも、傷口がまだ完治していないうちにまた痛めつけられてしまう。1999年4月の初めに、14

歳の華人少女の辰己洋子は何の理由もなく同年代の日本人女子同級生に2時間半も殴られ、体中傷だらけになった。殴る理由を聞いたら、「中国人だから殴る」だけであった。首謀者は14万円を強要し、これからも殴ると言いふらした。事件そのもの及び日本社会の当事者に対するえこひいきは華僑、とりわけ華人には精神的に強いショックを与えたのが想像できるものである¹¹⁾。調査結果によれば、差別視されていないと思うのは33.1% (34.3%)にとどまり、二世三世華僑華人のほとんどは相変わらず差別視されていると思っていることが分かる。また、日本政府への期待に関してはそれぞれ、67.5% (58.8%)の人は平等な雇用機会、43.6% (31.4%)の人は平等な社会福祉、23.7% (27.5%)の人は民族教育への支援、56.2% (61.8%)の人は参政権への承認を期待している。

日本は単一民族で、日本社会の自己反省の「閉鎖」は極めて目立っている。日本社会の欠点についてそれぞれ、53.7% (46%)の回答者は「外国人に対する閉鎖」と認め、49% (51%)の回答者は「欧米崇拝、アジア軽視」と見ている。アジアからの移住者は事業が成功しても、日本社会に融合しようと思っても、外国人として門外に阻まれる可能性が大きい。在日韓国人三世の柳美里氏の経歴は日本社会の「閉鎖」を物語っている。家庭では小さい時から韓国語を勉強させずに日本語を教えこみ、日本人のような名前をつけ、韓国人だと知られて差別を受けるといけないからとして、日本人クラスメートを家まで招かなかったものの、彼女は小さい時から自分が韓国人で、周囲の人々も彼女が韓国人であることを知っており、芥川賞など一連の大賞を受け有名作家になってからも、彼女が韓国人だと言わない人がいなかった。彼女の言うことはすこしでも不謹慎だと思われたら、すぐ右翼に「この韓国人め」として攻撃される。彼女は感無量にこう言う。「かえって日本人はなんとなく私に祖国志向をさせようとする」¹²⁾。陳徳仁氏は日本社会の閉鎖をよく理解しており、よく「中国人は皮が剥かれても、骨が剥けない」と言う。彼のお母さんは日本人で、彼は日本国首相から「日本天皇勲5等瑞宝章」を受けた一人目の華僑で、日本に帰化するのには難しいことではないが、最後まで帰化せず、「堂々たる中国人である」ことを貫いた。

ふだん、華僑華人は日本人と仲良く暮らしていても、非常時になると、状況が変わってくる。「絶対多数の日本人は比較的友好的で、今皆仲良くしているといっても、日本人は華僑華人を支那人と罵り、右翼団体はいつも中国及び華僑華人を攻撃するビラを配布し、暴力団もよく中国を熱愛する華僑を脅かしていることを見て、もし中日間で戦争が起こったら、華僑華人の二次大戦における境遇が再現するだろう」と、ある華僑華人はこう言ったのである。

多くの学者は長い間、アメリカなどの国々の華人はすでに現地文化を志向し、現地人としてのアイデンティティをもっていると考えている。この主張はまだ検討する余地があると思われる。事実は無情なものである。2001年初めの中米飛行機衝突事件は中米両国にとって小さな

衝突ではあるが、正義は中国側にあるとはいうものの、アメリカのマスコミやインターネットではアメリカ華人を侮蔑、攻撃、恐喝する風潮が起こった。多くのマスコミでは民衆に中華料理屋に行かないよう訴え、すべての国家実験室は華人科学者を除名し、華人を中国に追い返すと書きたてられた。ウェストコビーナ市長の黄恩寧氏は、中米間で問題が起こるたびに、在米華人は不公正な待遇を受け、この偏見を逃れるためには、何代かの人々の努力が必要であると主張している¹³⁾。アメリカと日本は同盟国ではあるが、2001年に上映されたアメリカの映画である『真珠湾』は第二次大戦中の日僑を醜悪化したということで、映画が上映される前から、アメリカ在住の日本人は大変心配し、『「日本籍アメリカ市民連盟』がとくに子供が学校で差別、いじめの対象となるのを心配した¹⁴⁾。外来移民を差別する現象は、大多数の国に普遍的に存在しているから、華僑華人は本当の意味での現地人や現地文化を志向する可能性が薄い。

華僑華人は同化されたように見えても、実際はそうでもない。インドネシアでは中華文化が30年あまり禁じられ、40歳以下の華人は中国語ができないにもかかわらず、2000年以後解禁されると、中華文化はにわかに復興してきた。台湾は日本に50年間も植民地として占領され、日本では名前の強制変更から民族文化活動の禁止まで、在日台湾同胞に対する同化は強化されながらも、在日台湾人は日本人に同化されたように見えたが、第二次大戦後台湾が祖国に返還されると、彼らはすぐに中国文化を勉強し始め、絶対多数の青少年は華僑学校に入学したという¹⁵⁾。在日台湾同胞はまた中国国籍の回復を求め、その人数が1万人余りにも達し、華僑全体の40%を占めた。言い換えれば、在日台湾人はほとんど全部中国国籍を取り戻した。これはスターリンが言うように、「民族と民族特徴はかなりの安定性と同化政策に対する大きな抵抗力をもっている」¹⁶⁾。

インドネシアなど多くの国の華人と違っているのは、神戸の二世三世華僑華人は数十年来絶え間なくずっと中華文化を提唱し継承してきた。また、長い間、神戸華僑、とりわけ福清人華僑華人はずっと安定している。人口比率が少ないわりに安定した華僑団体を有する居留国または居留地が少ない。華僑は今でも顕著な帰化の傾向にあり、1985年の「改正国籍法」が客観的に華僑の生存に有利であるにもかかわらず、調査の結果では7.5% (18.6%) の人はその規定が強制帰化であると考え、16.3% (21%) の人は華僑人口の減少を心配している。彼らは帰化しても、華僑社会を離れようとしなないことは彼らに中華文化志向をさせる可能性をさらに大きくすることがわかる。

5. おわりに

韓国政府は昨年6月30日に公職選挙法改正案が可決され、永住資格を持つ19歳以上の外国人に地方選挙権が認められた。これにより、『華声報』ソウル2006年4月17日の報道によると、在韓外国人永住者のうち、投票権をもつ外国人は6579人になり、国別では華僑6511人、日本人51人（日本の報道では100人）、アメリカ人8人、ドイツ人など9人となっている。『朝鮮日報』によると、去る5月31日の韓国地方選の際、在韓華僑協会理事林培正一家揃ってソウル南加佐洞の投票所に投票した。更に『華声報』によると、在韓華僑のために設置した「延南洞第二投票所」に投票した人数は4021人に上った。在韓華僑の多くは心から、「今までは客でしたが、今日から主人公になった」と喜んでいたようである。在日華僑華人もきっとこのような喜ばしい日を迎えることと思っやまない。

戦後60年を過ぎ、中日両国は絶えず平和共進の道を共に探求してきた。日本政府は国際化政策を継続し、文化交流等を強化する努力も見られるが、在日華僑華人に対する差別視や不平等な待遇を改善することだけでも、きっと両国の関係改善に大きく寄与することであろう。

注

- 1) 日本入管統計研究会『在留外国人統計』、過放『日本華僑のアイデンティティの変容——華僑の多元的共生』、東信堂、1999年。
- 2) 日本法務省の統計によれば、在日中国人の帰化人数は1989年には1,066人、1999年には5,533人、年増加率が17%であった。そのうちの「永住者」数は不明であるが、この増加率で計算すれば、「永住者」はここ数年の帰化率が過去より高いようである。「中国には毎年40万人の海外移民がいる」（アメリカ『僑報』、2000年11月8日）参照。
- 3) 崔貴強『シンガポール・マレーシア華人の国家指向の転換』、厦門大学出版社、1989年1月参照。
- 4) 董四代『文化観念創新と管理革命』、天津社会科学出版社、1997年6月より。
- 5) ホワイト「文化科学」、林宝卿『漢語と中国文化』、科学出版社、2000年5月。
- 6) 「神戸中華同文学校大事記」、羅晃潮『扶桑覓僑踪』、暨南大学出版社、1994年、131ページ。
- 7) 注1) 参照、282ページ。
- 8) 林宝卿『漢語と中国文化』、科学出版社、2000年、63ページ。
- 9) 日本『歴史地理教育』、1987年、(11)。
- 10) 曾国忠「神戸中華同文学校対台湾子弟の民族教育」、安井三吉編『近百年日中関係の史的展開と阪神華僑』、科学研究費研究成果報告書、1997年、55ページ。
- 11) 郭玉聡「日本新老華僑融合の必要性試論」、『南洋問題研究』、2000(2)。
- 12) 木羽「黒孩與柳美里対談」、日本『新華僑』、1998(10)。
- 13) アメリカ E-MAIL「大林・華人は種族差別に面する」、『環球時報』、北京、2001年4月24日。
- 14) 吳琦斎「華人参政の無形壁」、『アジア週刊』、2001年8月19日。

- 15) 曾国忠「神戸中華同文学校対台湾子弟の民族教育」、安井三吉編『近百年日中関係の史的展開と阪神華僑』、科学研究費研究成果報告書、1997年、55ページ。
- 16) 『スターリン全集』(11巻)、人民出版社、北京、1963年、299ページ。

主要参考文献

- 菅原幸助1949、『日本の華僑』、朝日新聞社
- 山田信夫編、1983、『日本華僑と文化摩擦』、巖南堂書店
- 戴國輝、1985、『華僑——「落葉帰根」から「落地生根」への苦悶と矛盾』、研文出版
- 田中宏、1990、『虚妄の国際国家・日本——アジアの視点から』、風媒社
- 斯波義信、1995、『華僑』、岩波書店
- 過放、1999、『在日華僑のアイデンティティの変容』、東信堂
- 王廣武、1999、『海外華僑と民族意識』、『孫文と華僑』、汲古書院
- Samuel P. Huntington, *The Clash of Civilizations*, Xinhua Publishing, 1999.
- Eric J. Hobsbawm, *Nations and Nationalism Since 1790*, Shanghai Publishing, 2000.
- 朱慧玲、2003、『日本華僑華人社会の変遷』、日本僑報社
- Samuel P. Huntington, *Who Are We?*, Xinhua Publishing, 2005.